

ICT を活用した探究的な学習過程の考察 －「総合的な学習（探究）の時間」に即して－

竹内 久顕

I はじめに

(1) ICT 教育をめぐる昨今の動向

先ごろ、文科省総合教育政策局の課長通知「学校の ICT 環境整備の充実に対応した教員養成等の充実について」(2020 年 3 月 6 日)が出され、教師の ICT 活用指導力向上に向けた教職課程の改善・充実が求められた。さらに、同通知を具体化したものとして、中教審初等中等教育分科会教員養成部会が「教職課程における教師の ICT 活用指導力充実に向けた取組について」(10 月 5 日)を取りまとめた。

そこでは、ICT 環境の整備が進展するという今日の状況を踏まえ、「ICT を活用して主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」を行なう力を教師に求めている。しかし、その際に重要なこととして、単に ICT を取り入れればよいわけではなく、「各教科等において育成すべき資質・能力」を的確に踏まえ、「各教科等の特質や ICT を活用する利点」などを理解した上で、「ICT を活用する場面と活用しない場면을効果的に組み合わせること」に留意すべきであると指摘している。さらに、各教科等の指導における「情報活用能力の育成の在り方」や「ICT の活用による学習活動の充実」について、『学習指導要領』および『学習指導要領解説』を参照すべきであると記されている。

これらの文書には、「GIGA スクール構想」

を旗印に「一人一台端末」「個別最適化」などの語が並ぶが、そこには、今日を「知識基盤社会」「Society5.0」ととらえる社会認識が背景にある。また、コロナ禍のオンライン活用といった事態はこうした動きをいっそう後押しするであろうと考えられる。「Society5.0」や「個別最適化」などに対しては、教育学の知見からの批判的検討がすでに多くなされてはいるが、学校現場も教職課程もこうした動きに抗することは難しい。そうであれば、批判的視点を保ちつつも、これら通知等の行政諸文書を“活用”した、あるいは“逆手”に取った工夫をすることが現実的な対応であると考えざるを得ない。そこで、本稿では、あえて上記通知等への応答を試みることで、教職課程での学びにおいて何ができるかを考察してみたい。

(2) 本稿の課題

学校の ICT 化が至上命題のように独り歩きしかねない現状にあって、上記教員養成部会の取りまとめ文書において、慎重にブレーキがかけられている点に着目したい。すなわち、初めに ICT ありきではなく、あくまでも「各教科等の特質や ICT を活用する利点」などを考慮したうえで、「ICT を活用する場面と活用しない場面」があることを想定している点である。本稿では、「各教科等」の例として「総合的な

学習(探究)の時間」を取り上げ、その目標と育成すべき資質・能力を踏まえて指導方法を工夫する際にICTをどのように活用できるのかを考察することで、「各教科等の特質やICTを活用する利点」を示してみたい。

なお、本稿で、「総合的な学習(探究)の時間」を取り上げる理由は次の通り。

①学習指導要領において、総合的な学習の学習プロセス、すなわち「探究的な学習の過程」が「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」の4段階から成るとされているが、4段階のいずれもがICTとの親和性が高い。

②学習指導要領において、総合的な学習における探究課題として、「国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題」が例示されているが、これら諸課題を学習する際に、とりわけ「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」において、インターネット、分析ツール、プレゼンテーションアプリなどの活用が有効性を発揮し得る。

③筆者はこれまで、立教大の「社会公民教育法2」において、平和教育・コンフリクト解決教育・シティズンシップ教育のような「教科等横断的な視点」で構成される広領域テーマの授業づくりを課題として取り上げてきた。その際、学生には、社会科・公民科の授業として構想させたが、「教科等横断的な視点」で他の教科等との関連を考察するよう指導していた。これは、社会科・公民科と総合的な学習との往還へと発展させる契機を含んだものである。

本稿では、まず、『学習指導要領』及び『解説』を手掛かりに、総合的な学習の学習過程(指導過程)を概観する。次に、その学習過程(指導過程)においてどのようにICTが活用できるかを、近年文科省が発表したICT教育に関する諸文書を参照して論じる。最後に、以上の整理を踏まえた考察を試みる。

＜注＞2018年告示の『高等学校学習指導要領』では、名称が「総合的な探究の時間」と改まったため、本来「総合的な学習(探究)」と表記すべきところだが、本稿では小中高合わせて「総合的な学習」と略記する。

Ⅱ「総合的な学習の時間」の学習過程(指導過程)

(1) これまでの総合的な学習の成果と課題

そもそも「総合的な学習の時間」は、1998年告示の学習指導要領で初めて登場した。その総則において、各学校は「横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものとする」と規定され、そのねらいとして「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」と「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること」の2点が示された。そして、そのねらいを踏まえて、「国際理解、情報、環境、福祉・健康」などといった「横断的・総合的な課題」「生徒の興味・関心に基づく課題」「地域や学校の特色に応じた課題」などの学習課題が例示された。

しかしながら、総合的な学習は、目標や内容、また指導方法や評価方法が教科と比べ明確とは言い難く、学校による差が大きかった点は反省されねばなるまい。こうした問題点については、『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（中学校編）』（2010 年 11 月）においても、要旨次のように指摘されている。

日本においても、また OECD 等の国際社会においても、単なる知識の量にとどまらない総合的な学力が求められているというのが今日の動向である。にもかかわらず、「総合的な学力を指導・評価する手法」の開発の難しさや、「上級学校への入学試験や社会人採用試験からのニーズ」という現実を背景として、実際の学校現場では、「既存の知識・技能の習得に重点を置いた指導」を余儀なくされてきた。

こうした現状と問題に関し、新学習指導要領（小中学校 2017 年告示、高等学校 2018 年告示）の根拠となる中教審答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』（2016 年 12 月）では、「総合的な学習の時間」について次のように記されている。

まず、旧学習指導要領（2008 年、2009 年告示）の成果としては、「全国学力・学習状況調査の分析等において、総合的な学習の時間で探究のプロセスを意識した学習活動に取り組んでいる児童・生徒ほど各教科の正答率が高い傾向にある」ことや「PISA における好成績につながった」ことがあげられている。その一方で、今後の課題としては、次の 3 点が指摘された。

- ①「総合的な学習の時間」でどのような資質・能力を育成するのか、また、「総合的な学

習の時間」と各教科等との関連をどう考えるのかといった点について学校差が大きい。

- ②探究のプロセスのうち「整理・分析」「まとめ・表現」に対する取り組みが十分ではない。
- ③小・中学校の取り組みに比べ、高等学校にふさわしい「総合的な学習の時間」の実践が十分展開されているとは言い難い。

次いで、改善のポイントとしては、上記 3 課題への対応のほか、「持続可能な社会という視点」から、次の 2 点が指摘された。

- ①ESD に求められる資質・能力（「多様性」「相互性」「有限性」「公平性」「連携性」「責任性」といった概念の理解、「批判的に考える力」「未来像を予測して計画を立てる力」「多面的・総合的に考える力」などの力）は、「総合的な学習の時間」における探究的な学習でこそ育成されるものであること。
- ②そのような資質・能力の育成を意識した学習を展開すること。ESD の視点からの教科横断的な学習を一層充実していく際に、「総合的な学習の時間」が中心的な役割を果たしていくこと。

以上のような検討を経て告示された新学習指導要領では、「第 4 章 総合的な学習の時間」の「第 1 目標」において、その目標が次のように示された。

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。

(2) 実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。

(3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

「第1 目標」の記述のうち、総合的な学習の学習過程(指導過程)を考えるうえでカギとなる概念として、「探究的な学習の過程」「(探究)課題」「主体的・協働的、社会参画」の3点に着目し、『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』を手掛かりに、さらに読み解いていこう。

(2) 探究的な学習の過程(探究のプロセス)

「探究的な学習の過程(探究のプロセス)」は、「第1 目標」の(2)に、「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」の4段階から成るものとして示されている。それらは、『解説』では次のように説明されている。

①課題の設定：体験活動などを通して、課題を設定し課題意識をもつ。

②情報の収集：必要な情報を取り出したり収集したりする。

③整理・分析：収集した情報を、整理したり分析したりして思考する。

④まとめ・表現：気付きや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する。

この4段階の過程を繰り返しつつ学習を進める際に、「探究的な見方・考え方」を働かせるということになるのだが、それは、「各教科等における見方・考え方を総合的に働かせる」と「総合的な学習の時間に固有な見方・考え方を働かせる」の2要素から成っている。前者は各教科等固有のものだが、後者は「特定の教科等の視点だけで捉えきれない広範な事象を、多様な角度から俯瞰して捉える」ことと「課題の探究を通して自己の生き方を問い続ける」ことと説明されている。すなわち、4段階の「探究のプロセス」を経つつ、「教科等の学習」と「教科等横断的な学習」の往還を組み込んでいくことで、「探究的な学習」を進めるということになる。

また、「探究的な学習の過程」に関連して、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の「2 内容の取扱い」に次のように記されている。

(2) 探究的な学習の過程においては、他者と協働して課題を解決しようとする学習活動や、言語により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動が行われるようにすること。その際、例えば、比較する、分類する、関連付けるなどの考えるための技法が活用されるようにすること。

ここでいう「考えるための技法」とは、『解説』によると、「考える際に必要になる情報の処理方法」であり、次のような説明が記されている。「自分が普段無意識の内に立っていた視点の位置を、明確な目的意識の下、自覚的に移動する」ことによって、「同じ事物・現象に対して別な意味の発見を促し、より本質的な理解や洞察を得る」というものである。そして、総合的な学習において身につけた「視点の移動」

という「考えるための技法」を、教科等横断的に「様々な課題解決において適切かつ効果的に活用できる」ような指導が求められている。

では、「視点の移動」を基本とする「考えるための技法」には具体的にはどのようなものがあるのだろうか。『学習指導要領』には示されていないが、『解説』には次のようなものが例示されている。

- ・ 順序付ける：ある視点や条件に沿って対象を並び替える。
- ・ 比較する：ある視点から共通点や相違点を明らかにする。
- ・ 分類する：ある視点から共通点のあるもの同士をまとめる。
- ・ 関連付ける：複数の対象がどのような関係にあるかを見付ける。ある対象に関係するものを見付けて増やしていく。
- ・ 多面的・多角的に見る：対象のもつ複数の性質に着目したり、対象を異なる複数の角度から捉えたりする。
- ・ 理由付ける（原因や根拠を見付ける）：対象の理由や原因、根拠を見付けたり予想したりする。
- ・ 見通す（結果を予想する）：見通しを立てる。物事の結果を予想する。
- ・ 具体化する（個別化する、分解する）：対象に関する上位概念・規則に当てはまる具体例を挙げたり、対象を構成する下位概念や要素に分けたりする。
- ・ 抽象化する（一般化する、統合する）：対象に関する上位概念や法則を挙げたり、複数の対象を一つにまとめたりする。
- ・ 構造化する：考えを構造的（網構造・層構

造など）に整理する。

（３）探究課題

「探究課題」を「第１ 目標」から読み解けば、「実社会や実生活の中から」見出されるもので、そうした課題をよりよく解決することで「自己の生き方を考えていく」ことができるような課題を意味していることが分かる。そして、続く「第２ 各学校において定める目標及び内容」において、「国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題」「地域や学校の特色に応じた課題」「生徒の興味・関心に基づく課題」「職業や自己の将来に関する課題」など４例が示されているが、これらの例示に関して、『解説』では次のように説明されている。

第１例は、「社会の変化に伴って切実に意識されるようになってきた現代社会の諸課題」であり、「持続可能な社会の実現に関わる課題」である。また、これらの課題は「正解や答えが一つに定まっているもの」ではないため、「従来の各教科等の枠組みでは必ずしも適切に扱うことができない」。したがって、こうした課題こそが総合的な学習の探究課題として積極的に取り上げる意義があるということになる。具体例として次のようなものが示されている。

- ・ 国際理解：地域に暮らす外国人とその人たちが大切にしている文化や価値観
- ・ 情報：情報化の進展とそれに伴う日常生活や社会の変化
- ・ 環境：地域の自然環境とそこに起きている環境問題
- ・ 福祉：身の回りの高齢者とその暮らしを支

援する仕組みや人々

- ・健康：毎日の健康な生活とストレスのある社会

第2例は、「町づくり」「伝統文化」「地域経済」「防災」などの諸課題のことで、これらは、「よりよい郷土の創造に関わって生じる」ものであり、「生徒が地域における自己の生き方との関わりで考え、よりよい解決に向けて地域社会で行動していく」ことが期待されている。具体例として次のようなものが示されている。

- ・町づくり：町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織
- ・伝統文化：地域の伝統や文化とその継承に力を注ぐ人々
- ・地域経済：商店街の再生に向けて努力する人々と地域社会
- ・防災：防災のための安全な町づくりとその取組

第3例と第4例の具体例は次の通り。

- ・ものづくり：ものづくりの面白さや工夫と生活の発展
- ・生命：生命現象の神秘や不思議さと、そのすばらしさ
- ・職業：職業の選択と社会への貢献
- ・勤労：働くことの意味や働く人の夢や願い

では、実際の学校におけるこれら探究課題への取り組み状況はどうなっているだろうか。文科省が実施した「平成30年度公立小・中学校等における教育課程の編成・実施状況調査」(2019年3月)中の「中学校における総合的な

学習の時間の具体的な学習内容」(複数回答)によると、4割以上の中学校で取り上げられているテーマが、「キャリア」「伝統と文化」「福祉」「地域の人々の暮らし」「環境」で、「防災」「国際理解」「情報」「町づくり」が続く(多数回答順)。第1例が4テーマ、第2例が4テーマ、第3例・第4例が1テーマとなっており、第1例と第2例が多く取り上げられている。第3例・第4例に関しては、『解説』で「生徒が何を感じ、どのように考え、あるいはどのように行動しているか、その実態を幅広く正確に把握する必要がある」との注記がついているが、その点で取り上げることに難しさがあるのであろうか。

(4) 主体的・協働的、社会参画

「第1 目標」の(3)において、「主体的・協働的に取り組む」とともに「積極的に社会に参画しようとする態度」の育成が記されている。

『解説』によれば、「協働的」とは、共に協力するということのみならず、「異なる見方があることで解決への糸口もつかみやすくなる」ということを前提とし、「異なる意見を生かして新たな知を創造しようとする態度」をも含むと説明されている。そして、そうした学習の過程を経験することで、自他の尊重、異なる他者との協力といった態度を形成し、「社会に関わり参画しようとする意志」や「社会を創造する主体としての自覚」を育成することが期待されるという。

これは、先の「考えるための技法」として示された「視点の移動」を、探究課題に対して活用するのみならず、共に協働的な学習を進める生徒同士で活用し合うということでもあろう。

すなわち、「考えるための技法」は2つの対象－探究課題と協働の相手（学習仲間）－に対して活用できるものだという事である。

また、「第1 目標」の（3）に関連して、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の「1 指導計画の作成」の解説において、「主体的・対話的で深い学び」は、「必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではない」とされている点も留意したい。すなわち、「主体的・協働的」「社会に参画」という態度は、年間のあるいは2～3年間を見通した長期的な指導計画の中に位置付けるということである。総合的な学習は、他の教科と比べて年間指導計画の重要性が大きいということであろうが、この点については後日別稿で検討したい。

Ⅲ 「総合的な学習の時間」の学習過程（指導過程）におけるICTの活用

（1）総合的な学習におけるICT活用の基本方針

総合的な学習におけるICT機器の活用については、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の「2 内容の取扱い」にその記述がある。

（3）探究的な学習の過程においては、コンピュータや情報通信ネットワークなどを適切かつ効果的に活用して、情報を収集・整理・発信するなどの学習活動が行われるよう工夫すること。その際、情報や情報手段を主体的に選択し活用できるよう配慮すること。

この点について『解説』では、「探究的な学習の過程（探究のプロセス）」に即して情報を「収集・整理・発信」する際に、「コンピュータや情報通信ネットワークなどを含めた多様な情報手段」を選択・活用することが推奨されてお

り、「本やインターネットを活用する」「適切な相手を見付けて問合せをする」「整理・分析して自分なりの考えや意見をもつ」「身近な人にプレゼンテーションする」「インターネットを使って広く発信する」などが例示されている。

では、『解説』が言う「多様な情報手段」の選択・推奨には、具体的にはどのような手段とその活用があり得るのだろうか。この点について、文科省のサイトに「各教科等の指導におけるICTの効果的な活用について」（2020年9月時点、随時更新）が設けられているが、そのうちの「生活科・総合的な学習（探究）の時間の指導におけるICTの活用について」を参照してみよう。

そこでは、ICTの活用によって期待される点として、「時間と空間を超えた学び」「個と集団の学びの深まり」「探究の高度化」の3点があげられている。

①「時間と空間を超えた学び」としては、次の4つの「接続」が例示されている。

- ・ 社会教育施設との接続：公立図書館などのオンラインサービスを活用する。
- ・ 家庭との接続：家庭での学習に際し、家庭と学校、子ども同士がオンラインで結びつく。
- ・ 地域との接続：地域の調査フィールドでの情報収集を行なう際に、動画や静止画、マップの位置情報などを随時集積したり、子ども同士で交換したりする。
- ・ 専門家等との接続：オンラインを活用して、国内外の専門家との情報収集や交流を行なう。

②「個と集団の学びの深まり」は、協働的な

学習で期待される ICT の効用である。「個の学び」「集団の学び」の2つの深まりが例示されており、その両者を往還することで協働的な問題解決の良さを実感することができる。

- 個の学び：探究的な学習の過程で収集したデジタルデータなどを集積・保存するとともに、随時それらを分析・検索などにより再構成することが可能となる。その結果、連続的・持続的な「個の学びの深まり」が実現する。
- 集団の学び：各自が収集したデジタルデータをクラウドに保存することで、集団内で共有することが可能となる。その結果、多様な視点でのデータの整理・分析を通して、集団としての新たな知を形成する「集団の学びの深まり」が実現する。

③「探究の高度化」は「探究的な学習の過程（探究のプロセス）」の4段階における ICT の効果的活用の事だが、これに関しては次項で検討する。

（2）「探究的な学習の過程（探究のプロセス）」における ICT の活用

では、「探究的な学習の過程（探究のプロセス）」において、具体的にはどのような ICT の活用があり得るのだろうか。この点について考えるうえで参考となる、文科省の文書として次の3点がある（発表順）。

第1に、『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（中学校編）』（2011年11月）の第1編第2章の「第2節 探究的な学習における学習指導」では、具体的な実践例が40例

紹介されている（ICTを活用しない事例も含まれる）。第2に、新学習指導要領に対応して教育の情報化を推進する際の参考資料として、文科省が『教育の情報化に関する手引き（追補版）』（2020年6月）を発表した。同手引き第4章の「第3節 各教科等における ICT を活用した教育の充実」に、中学校と高等学校の説明・事例が記載されている。第3に、先に紹介した「生活科・総合的な学習（探究）の時間の指導における ICT の活用について」（2020年9月）の「探究の高度化」の項に、説明・事例が記載されている

これらを参照・引用しつつ、ICTを活用することでどのような学習が可能か、「探究的な学習の過程（探究のプロセス）」に即して整理してみよう。なお、以下の具体例のうち、（ ）内に記したものは筆者が考案・考察したものである。

①「課題の設定」においては、WEB上で視聴した国内外の動画や、デジタルカメラ等で記録した身近な対象の画像などのデジタル情報を見ることで課題を設定することなどが考えられる。「STEAM、SDGs、地域活性化など、現代的な課題の設定」において有効である。

- 「資料を比較して課題を設定する」（プロジェクターや電子黒板を活用して資料を拡大したり、課題を他者と共有したりする）。
- 「グラフの推移を予測して課題を設定する」（タブレットで、グラフに書込んだり消去したりしながら仮説を立てる）。
- 「ウェビングでイメージを広げて課題を設定する」（タブレットで、ウェビング作成

のアプリを活用する)。

②情報の収集：インターネット検索、電子メールやSNSを利用した取材等を通して情報を収集することなどが考えられる。フォルダの整理やクラウドの活用によって、「多様な情報、多量な情報、最新の情報、加工しやすい情報」を利用・共有する際に有効である。ただし、安易にネット情報の引き写しで満足しないように、聞き取りや見学のような「従来から学校教育においてなされてきた直接体験を重視した方法による情報の収集」の意義を見失わないよう留意する必要がある。

・「アンケート調査で情報を収集する」(アンケート結果をPCやタブレットに保存しデータを蓄積する)。

・「インターネットで情報を収集する」(ICTが最も得意とする場面で、先のアンケート調査もSNSを活用すればより広範囲の情報収集が可能となる)。

・「集めた情報をコンピュータフォルダに蓄積する」(PCやUSBなどの機器への保存だけでなく、クラウドを活用してグループメンバーでデータを共有することによって協働的な学習が容易になる)。

③整理・分析：蓄積したデータの取捨選択、表計算ソフトを用いた解析等が考えられる。「情報を比較、分類、序列化、関連付けする」などを通して情報を再構成するうえで有効である。

・「スクラップシートで整理・分析する」(例えば画像データの場合、PCやタブレットを用いれば切り取りや貼り付けが容易に行

なえる)。

・「図・グラフ・マップで整理・分析する」(こうした作業を可能とする学習アプリはすでに複数開発されており、ICTを活用しやすい)。

・「“メリット・デメリット”“ビフォー・アフター”の視点で整理・分析する」「SWOT分析で整理・分析する」(Wordの表やExcelを活用すれば、データの追記・削除や移動が容易に行なえる)。

・「他の生徒の考えにコメントを付けられるような機能を活用する」(Wordのコメントや掲示板のスレッド、また、LINE等のSNSでの意見交換を活用する)。

④まとめ・表現：プレゼンテーションやビデオレター、国内外へ向けてのWEB上での発信などが考えられる。各自の端末で「手軽に加工を繰り返したり、学習の成果物を継続的に集積したりしていく」ことができ、「自分自身の考えを幅広く伝え、その効果を検証して、課題を更新させていく」うえで有効である。その際、地域の人々や他の学校の生徒たちから、「自分の発信した情報に対する感想やアドバイス」が返り、「それを基にして改善したり発展させたりするサイクル」を構築することで、「受け手の状況を踏まえた情報発信」に対する意識を高めるような工夫をすると一層効果的であろう。

・「プレゼンテーションでまとめ・表現する」(PowerPoint等のプレゼンテーション用アプリで作成し、プロジェクターや電子黒板を活用して発表する)。

- ・「新聞、レポート、パンフレット、ポスターでまとめ・表現する」(作成に際してはWordやExcelのほか、画像加工アプリや動画編集アプリを活用する)。
- ・「発信した情報に対する返信や反応が得られるように工夫する」(掲示板のスレッドやSNSのコメントを活用する)。
- ・「異なる学校を、ICTを活用した遠隔交流などにより結んで行う協働的な学習」(SNSの活用もあり得るが、SkypeやZoom等リアルタイムのオンライン式交流の方が効果的であろう。従来から活用されていたが、コロナ禍の昨今、こうしたオンラインツールの認知度が急速に高まり普及したことを前向きにとらえることができるだろう)。

Ⅳ まとめ

以上の検討を踏まえ、教職課程科目における学生指導に関わる工夫と課題について考察してみよう。

(1) 教科等と総合的な学習との往還—社会科(含地歴科・公民科)の場合

『学習指導要領』は、「教科等の学習」と「教科等横断的な学習」の往還を進めることで「探究的な見方・考え方」を働かせることができるというが、教科として社会科を想定した場合、「探究的な学習の過程(探究のプロセス)」と「探究課題」において検討すべき課題が見出される。

それは、「探究的な学習の過程(探究のプロセス)」として示されている「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」の4段階は、社会科で従来から組み込まれて来た「調べ学習」の手順と変わらないのではない

かということである。また、「探究課題」として挙げられる4例のうち、第1例「国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題」と第2例「地域や学校の特色に応じた課題」は、社会科の学習課題として欠かせない定番の課題ではないかということである。すなわち、総合的な学習の「探究課題」として第1例や第2例を取り上げ、「探究的な学習の過程(探究のプロセス)」に取り組んだ場合、社会科の「調べ学習」との違いが見えにくくなり、総合的な学習の固有性は何かという問いに、教師も生徒も直面するのではないだろうか。この、社会科と総合的な学習の往還については後日別稿で検討する予定だが、ここでは、3点指摘しておこう。

第1に、「探究的な学習の過程(探究のプロセス)」の4段階のうち、「①課題の設定」の意義を活かすということ。社会科の「調べ学習」では、「①課題の設定」については、教師が設定し皆で同じ課題に取り組むことが少なくない。たとえば、環境の単元(公民的分野)において地球温暖化について調べる、あるいは身近な地域の単元(地理的分野)において地域の商店街の現状と活性化について調べるといった具合に、教師や教科書であらかじめ設定されている課題に取り組むことが多い。したがって、総合的な学習ならではの学習過程としては、「①課題の設定」において生徒一人一人が主体的に課題を選択・設定するよう留意して指導することが求められる。

第2に、「総合的な学習の時間に固有な見方・考え方」としてあげられている「課題の探究を通して自己の生き方を問い続ける」点に着目す

るということ。「自己の生き方」にも目を向けるということは社会科においても意識されることではあるが、この課題は、社会科にとどまらず道徳科・国語科・家庭科、さらに特別活動や生活指導といった教科等につながる課題でもあるし、そうでなければ「自己の生き方を問い続ける」ことにはなるまい。たとえば、社会科で地球温暖化について学習したとき、自分に何ができるか、自分の生活をどのように変えていけばよいかといった「態度」の育成を教師は心がけるだろうが、それはもはや社会科の枠を超えた教科等横断的な学習と言ってもよいだろう。したがって、社会科の固有性は何か、すなわち社会科の役割はどこまでかという問いと、総合的な学習の固有性は何か、すなわち総合的な学習の役割は何かという、いわば役割分担のような視点から両者の往還を検討する必要があるのではないだろうか。

第3に、「探究的な学習の過程（探究のプロセス）」における ICT の活用はそのまま社会科でも応用できるということ。諸文書を手掛かりにまとめた4段階それぞれの ICT の活用事例は、少なくとも②③④に関しては社会科学習にも取り入れることができる。

（2）既存の「考えるための技法」への着目とその応用

「考えるための技法」として示された「視点の移動」は、筆者が、かねてからコンフリクト解決教育の手法として取り入れてきたものでもあった。桃太郎話を素材とし、桃太郎に視点を置くと鬼が悪者に見え、鬼に視点を置くと桃太郎が鬼ヶ島に侵入した強盗に見え、犬猿雉に視

点を置くと桃太郎はキビ団子だけで酷使する独裁者に見えるといったもので、『解説』が記すように、「同じ事物・現象に対して別な意味の発見」を可能とし、同じ事象を多面的に客観的とらえることができる。そして、この手法を応用すれば、差別・偏見に関わる問題や対立する利害当事者が登場する問題といった現実に生起する様々な課題解決に活用できる。

このことは、逆に言えば、コンフリクト解決教育や平和教育、人権教育といった教育諸領域の実践においてすでに試みられ蓄積されてきた多くの方法が、総合的な学習の「考えるための技法」として応用できるということである。

（3）「協働的」な学びにおける ICT の活用

「協働的」とは、役割分担をして力を合わせるというのみならず、「異なる意見を生かして新たな知を創造しようとする態度」をも含むというものであった。そして、「視点の移動」は、探究課題のみならず協働の相手（学習仲間）に対しても向けられるということを先に確認した。そして、「生活科・総合的な学習（探究）の時間の指導における ICT の活用について」（2020年9月）では、ICTを活用することで集団としての新たな知を形成する「集団の学びの深まり」が実現することが求められていた。

こうした成果が期待される一方で、「異なる意見」を生かして「集団の学びを深める」ということは、大人でも難しいということに留意せねばならない。たとえば、探究課題として国際理解を取り上げたとき、『解説』では「地域に暮らす外国人とその人たちが大切にしている文化や価値観」が例示されていたが、「異なる意

見」の中にはヘイト表現が現れる可能性は考えられる。SNS で意見交換や発信をしたり、その記録データを保存したりしたときに、集団の学びを破壊する事態も想定せねばなるまい。したがって、情報モラルや情報リテラシーの学習と指導が欠かせなくなるが、それらは主に道徳科、技術家庭科（技術分野）、情報科の学習課題となる。ICT を「探究的な学習の過程（探究のプロセス）」に活用する場合、この問題に対処するための教科等との往還を意識的に行なう必要があるだろう。

＜参考資料＞

- ＊『学習指導要領』『解説』以外で、本稿において参照した資料
- ・ 文部科学省『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（中学校編）』（2011 年 11 月）
- ・ 中央教育審議会（答申）『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』（2016 年 12 月）
- ・ 文部科学省「平成 30 年度公立小・中学校等における教育課程の編成・実施状況調査」（2019 年 3 月）
- ・ 文部科学省総合教育政策局（課長通知）「学校の ICT 環境整備の充実に対応した教員養成等の充実について」（2020 年 3 月）
- ・ 文部科学省『教育の情報化に関する手引き（追補版）』（2020 年 6 月）
- ・ 文部科学省（WEB）「各教科等の指導における ICT の効果的な活用について」（2020 年 9 月）
- ・ 中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会「教職課程における教師の ICT 活用指導力充実に向けた取組について」（2020 年 10 月）